近況報告

文学研究科歴史学専攻博士前期課程
高妻朗久

大分県公文書館で働き始めて、三年が経過しようとしている。私の主な業務は、岡山県出身で、明治初期の大分県長官である香川真一のの旧邸の襖で発見された下張文書群の目録整備であるが、ほかにもレファレンス（利用相談）対応や展示の手伝いがあり、昨年度からは別府大学のアーカイブズ課程の、公文書館における実習指導も担当するようになった。

下張文書群は、襖の素材として使用されていたものであるため、断片状態のものもある。それらを撮影した数千点の写真データを見ながら、パソコンで資料検索用の目録を整備するのである。

印象としては、明治初期の大分県の公文書の下書きや帳面の断片が多いが、岡山県の港で水揚げされる海産物の帳面や、岡山藩の役人が朝鮮通信使の案内として従事した際の書き付けなども含まれている。大分県長官在任時に発生した行政文書のうち、下書きや不要となったものを故郷に持ち帰り、地元の古紙問屋から買った古紙とあわせて家を建てる際に再利用して襖を作成したのだろうと推測する。ほかにも、香川家に招かれた人の礼状や、養子に出した実子の成長を伝える年賀状、かつての部下である大分県の役人からの手紙、設立に参加した会社の運営に関する書状など、様々な書状を読むのは大変だが面白い。

個人的には、修論のテーマと重なるような、西南戦争期の大分県に関する書状はなかろうかと勝手に期待しているのだが、今のところそのような気配はない。なかなか手ごわいが、がっぷり四つに組んでやろうと意気込みだけはあるつもりでいる。

レファレンスは、一昨年の近況報告にも書いたように、落ち着いて相談者の話を聞くのが大切である。

私は、人前に出てものを話したりするのが苦手だから、この対応に苦労するが、近ごろでは、ごくごく稀にではあるけれども、「高妻さん、相談したいんやけど、○○って資料ない？」と、指名してくれるリピーターもいる。

手ごわいのは、たまに来る子供たちである。昨年、窓口に現れた小学生たちは、宿題で小学校の歴史をまとめているので、なにか古い本はありますか、と言った。とりあえず、彼らが通う小学校の古い名称を調べ、その名称がつけられた昭和初期の沿革史があったから、いそいで出納したが、子供たちには、旧字体ばかりの古めかしい本は面白くなかったと見えて、歴代の校長先生の名前をメモするだけで帰ってしまった。

今年もまた、子供たちが小学校の歴史を調べていると相談に来た。今度は、何年頃にはじめて体育館ができたとか、ここに神社があるから、いまとは少し離れた土地に校舎が建っていたとか話してあげると、興味を持った風でふんふんと話しをきいていた。

アーカイブズ実習では、このレファレンス業務で私やほかの職員

が受け付けた相談をもとに「〇〇に関する資料を探しているのだけれど、公文書館にない？」という相談問題を作成し、課題にしている。学生さんは、相談に見合うような資料を出納し、かつ説明をしなければならない。

私も数年前に学生として実習を受け、同じようにレファレンス問題を解いた。今年は、戦時中の海軍の基地に関する相談や、戦前の別府にあった娯楽施設や観光地等に関する相談をもとに問題を作ったが、自分が出題する側になったのかと思うと不思議な気がする。また、大学院を休学中なので、修論の方にも力を入れねばならない。相変わらず西南戦争の電報をテーマにしているが、最近はそのなかでも特に、長崎県の電報に注目している。

当時の長崎県は、現在の佐賀県域も管轄していた。佐賀方面と海から西郷軍が来ないだろうかという点が、県庁の役人たちの知りたい情報だったようであり、戦場に県警警部を派遣して電報で逐一連絡させて、その記録が大量に長崎県には存在する。

時には、他県の状況にも気を配っており、増田宋太郎が大分県庁を襲撃したことも、いちはやく電報で情報をつかんでいる。当時、大分県庁にたてこもっていた香川真一の名前が見て取れる電報もたまにあり、これまた不思議な驚きを感じる。

奇しくも、来年の大河ドラマの主人公は西郷隆盛である。大分県公文書館にも、西南戦争に関する資料は多く残っているので、来年の展示のテーマは西南戦争にできないだろうかと考えつつ、今年こそは修論を仕上げたい。そんな近況である。